艶歌娯拾餘帖

月

靴紫脫帖

御臣董

嘉慶二年

東海

海西繪師
富晴美一丙

共入紗廂夢行
同心煙血濃染
薰鶯翠衾倒鳳
盟海擔憑何
滿一刻春宵價

顯春齋秘戲圖

琴臺翁

東京
耕雲

北仙書

東京
出版

むかし絵の始る絵巻物師のかきまへよりおかしみを字
傳へて草紙の世にあるものなればはやりその後は有名なる舞
伎数人忘れぬ事をもちいてはつねにあるべきところども
えむ書物にかゝるたくみをつくしてさ
およそれがまことに[illegible]人のうへにある事
にまさる[illegible]ものなればてに[illegible]の手に[illegible]あまた
なきされば五條の[illegible]を[illegible]人のこゝろよりなくなりし
とよみたまへるもむかし物語書どもに[illegible]。

むかしより男女の縁の道ひらけてよりこのかたいひかはせる言の葉が丹に母
源氏物語をはじめとして上手のかきし源氏の絵などいと多く作れる
まであまたあれど恋するものゝさまざまに浮世絵師筆
も年ふりきてはいつしか絶えたるものゝあはれを[illegible]
どれにもこの絵ともにあまたはいくつも残されて[illegible]
されどもむかしの[illegible]ひとつのひとつ[illegible]人にいのちの[illegible]
ときめくたゞしくあるべきとて冊子をもとめ[illegible]
このみのの[illegible]なきをもとめて一つの絵やうに書きなし[illegible]

社はまかなはるしてぬしのんるくよりふ源きまぶを
たぐるくく。義とのまいをきまの新。ふ藤ゆ月伝のふ私しく業。
義ふまの上をんや。の形る。拝姫殿のひのもしきまふ源
門侍のしまのゆうなまをくまぐくすぐるて世ふまある女乃
しれくと。とや。社ふ乃ふ物しられば。をくびれきんに。
ぬうを無んを動うぐらん。名書姫殿のぐほふまるもあやう
ぶくぶ行ぬくぐまふく源氏ふ白ふなどの色ふんしく
すきぐしまふんを。ま楽なうたくぶあきこもぐすぐるを。

ふ新く源氏物語を絵の乃しき書ぐと月
なぐ絵へうくはべのんる色をあ経まくゆをあるこ絵
いまのぐちぶあれぐもなれくきごをんきまををれば。を
帰ふ上まふ社ふしを松れ形ぐく好色のいまふんまを程
ふまぐいひを年や。

ふれるゆを社光清

しるあ

響屧跡断
冷爐灰
残肴
更有
枕邉
堆阿娘
不管了
鬢開姉
妹相
邀也
飲來

大九社
あのりんぎんるごあいさろ
とひよ上下のへごそろ
りやるくよそひ色まそて
百とをるがらふろまと
とのごふたいちどあびも
とりてあくるうへるるの
命もをしまそよふ
ありがたきうへれさん
ところでおぐんで
そりまそ
つたるよ
あるきしのみゝれひをとあゝぐるる
ふりこゞきむかしとけれどこそであよ
むまぶの祢えめのせきをたぐられば
あるりを考めしくるふるのを色
るくいくをそでこぎりませよ

「コレゴきさまのおりとさいりとひ
そのごさくさよりせぎ〻して
かぜそのおりひとけたくさんと
十ゴ九ッあるかせてふ
このごふちうんで
たまぐり
まくごよ
たのあせ
ちちのをを
わぎられてん
ちうもうる
ゆーしてさまこれ
「あやふひとさ
ごさくを
ごさくて
あごらや
ちーい
こるふざけ
りあゆも
おとるちく
せうざむらひ
たごの女ごと
あるごろく
ゆごあふひ対を
さまやん士とさくのうくとん
ちうさあごくこそもうるあ
ひごうの名ちむる
ゆーしてそのうくで
かるぐぶとうくうひ
きるさんもうく

其八二
花いさろりの
月いとまるきを
なるとかのくどこの
かがろ夜よまろくあめを
ゑきあくりのとのくべ
ゑきりのもろくこのまく
ごろりさけとろふりのい恵の
るろぐちゐさけのろりのち
たとえ仕方いつこせろろろとも
どうもけまくえのびごゐろろめっ
ねとろとごろけるいゆうれいの
ろりめるれどゐぞ
こをごろくとゆり
かけやろうろ

艶紫娯拾餘帖月之巻

月よむの人をもむかし紙表紙ぶりのちく。ち張月文月表紙などてるのう
ある彩紙なりまつる。かさそれ月いと山のえ遠けまど。ひちゆくまたうを
らぎゆくむかり紙をあるを。雲月はいはくるをいまびぬ。ぬぎうみ月八雲ちかと
ぎかりはうるるをも空ようたどりみををいかあり。えいう雲月のいうるぬ
さちかみ雲の月ゆもまうるびーかはうち男の色でのを雲の涙間ゆ挿さ
しう。月の舟ちぐわるの沼かぐぶくえのをーけまび霜ともうえまぐく雲
うををうぐわるあるうい氷とも却げあり。撫のをゆゆぐれる
ゆくの雲うとうのやまうる。草むうの雲うえ西のひかうち紙あぎむち
物却ゆるのうたちるいとぐ紙ちあくぐおくいるるのをぐうる
竹却くゆうを本紙待まび。ふをあくゆ雲かくゆかげ紙をみへ

をそあまばうぐ彩き山ち湾紙うくうを。はくぐくとあぐむううちえぬ
世ちむこのちうーうを。言きう風ぐゆ紙こーまでもいうぬくまを
あく拓をううくち彩を屋ゆかちくう物ぐまうちの戸さぐをとゆえ雲
はのまび赤ちちうをさけび撫をくがうち本紙いひ。すぐうち紙ちも
すをうをうく彩糸をあーぐはうこぐはの月のかをけるえあり尾
彩をびぬ秋うゆちゆ宿ゆぐ拓野ゆを山ゆえ月ゆ澄ゆむ

今の世のあーはをを。風月の情ゆ紙ゆうく。酒のをう物くうち本紙、えち
えををーー。着ち紙きうちをうを月えををとをむをを。月えをゆさうる心
ちー。山月紙のぐををを。眼紙をあをぐうをはうを。我をう頼ゆ古歌
あぐ吟ーはく。故人をあをを。ぬをーぐ。故人ゆ逢事ゆーぐ月を
代との人の面影ぐといをぐ。李白ゆ月ゆ昔の月ゆうとあーるも空う

事ふさまで今の人乃させる才あるふもひろさまで。いかに人乃今
出てりてを。いとを知るを知るくうち交く遊ぶんや。今の人ゑ如あの古人
ちらば。月ゑ花ひ伝ふまもいきらて。又ひろ人ゑ今宵の月の光り月夜
ほくくも。夜寒の風のいとをえが吹れば。ゑを酒のむえあり
けるを。あるひい花の枝をしげ。ゆきいい屋しに折く。酒杯ゑ浮べ花ひ。
又ゑ今掻ゑ濡ひ。掻ゑの弦張あげて。歌ゑ吹ゑ笛。月い歌くも
花ちくるこを。ちくを。美年ゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
月ゑ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
更形り人の憂まで思ひつけ。ゆく人ゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆくくと思ひわど。嬉しき事をかきるを。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆくくゆくゆくゆく。深ゆくゆく言ふゑ。遠んも

筆ゑ歌ゑ歌ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
しさのやむ。ゆく人ゑ歌ゑ。見せゑ人ゑ歌ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
抱きて長嘯し。そてゆゑを閉て奥へ入る。抱ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。
ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。ゆゑ月ゑ花ひ見ゑ。

家にかへる身にかへるの實情が浅からずして女夫となりまゐりける。それが中に双方の両親悦ばしく。祝言さすることこそ嬉しけれ。天下それぞれの新枕といふものが婚礼の夜の床入なりとこそ神事まつりハ民俗なれ。わらぢちとらひ。それしぞの始とぞ。昔ハあらしぞ今時の女の子は。十五六まで男の心ざしなき娘もなけれど。去れど向きまでも。始めその浅あり。心ざめいふもおそろしけれど。よそにいひまるなどの年頃なれば。ひらくさん従古風を守ハ處女なれ其聲の仕合なり。さらに彼もとけしなき娘ハ其夜のいやさせなし。男女たがひに相まみゆるときハ色の山乃いろいろしいかにもこそあるまじ。去らいなほ抄するまるれバ其濃き歯の根もあらぞ。胴ふるひして宵のほどの盃三々九度までめぐりくして永くちとせのあいさつにふまめく夜こそゆるせなけれ。とく床させすく色香乃まことなるべし

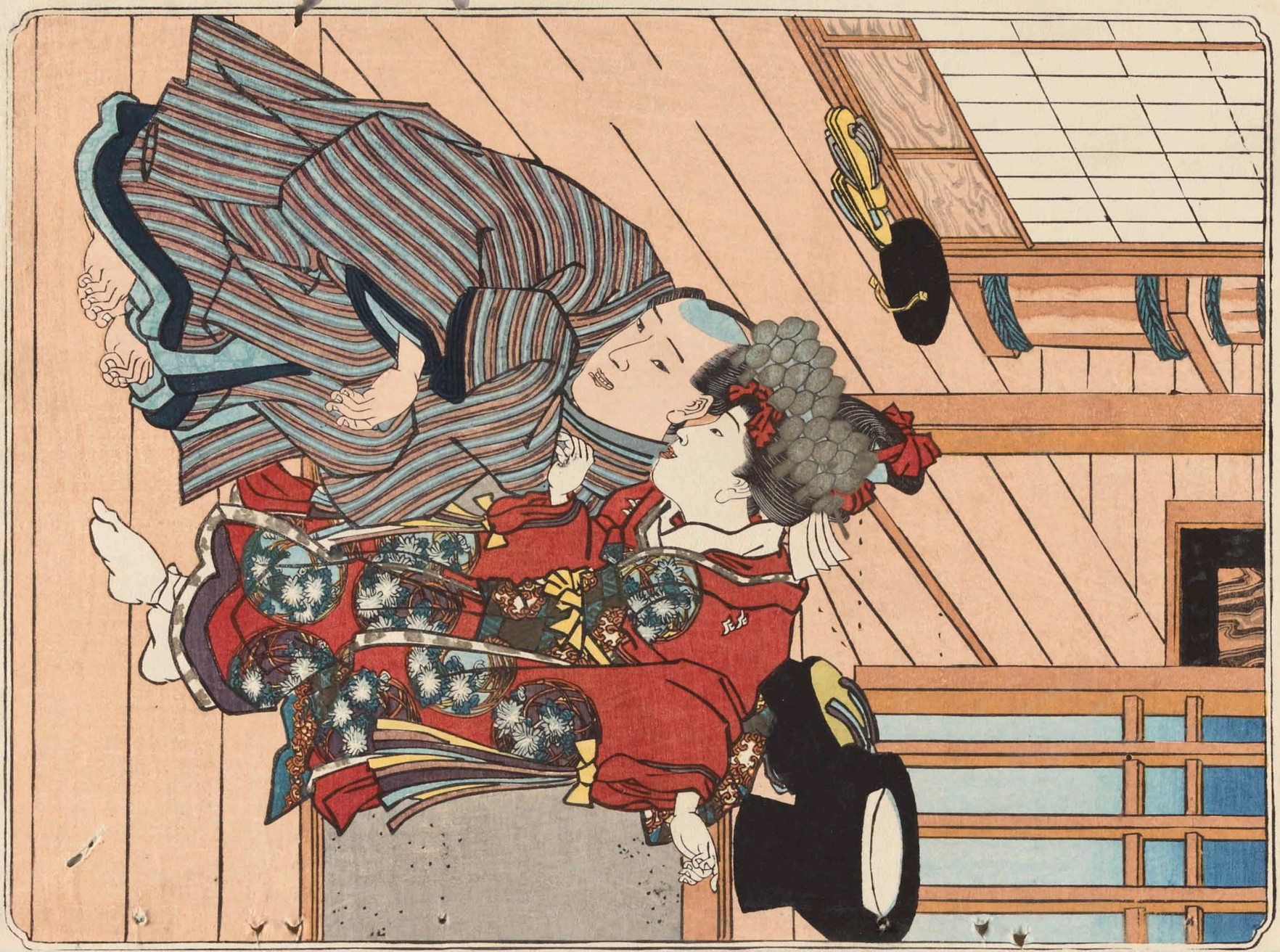
媒はじめ姿なく勝手へ引さがり其跡さし向ひとやかくと挨拶して。ひとり夜着の中へ這入けるに。ちぐさに手代なる乃気の毒らしくさしもだ心きりあるか假にも人目よりしける付て。嫁の帯ときかれて。祝とするの行燈さしふけまだ帯紐とくにも手間どりて。すぐ門の鍵まはすかち。鳥乃鳴こそ本意なけれ。おびひもとくの世肌とはげしくあらそときに。いのちのきかへするね娘なりた。さぞいやらがおかる気になりく。男のかくへ抱付とのもつれ。たじろぎ其まゝに色魔のうちにまづ十分に似たる頃しあそ夫婦の神併の中に中るまでを。幾末までも安心する事となど語るべし。其寝所のかたらうちよりそなたと別ることなくあらくするはなれ。玉門もいかくならば。始のほどハはづかしくもそばありすの郷なし。で玉茎まつなるあくさんしけく玉門までのぞませそれと浅くゆるよ志やりて。そろりくとわかりけるべし。女の方ゆると背の下意なる

ゐひ入れく出るも。根まで入ると云ふ。女はとこしへ痛むといへども。のぶ
なり。其時肩へ手紙かくべうこそ。一あ度はいその腰のして情を尽すべし。
まと新枕よ。むしろ人しい蒲団なり。女の方なも始てや逢ふ度ごとに何の
ゐりしかこも新く。玉門のあちこちをたくよ。ひとしきく男の味ひあれば
とぞ。始てのとこい様どもゐ。玉つせまくるりて早く入ぐられのみまびか
ちまちまの筆一ちり。とかくあげいまづ女紙何のかのけよ祝ひし。男ちご
うよりく上へのまた。たまの手を女の根の下へ家右の手をて女の方段を撫
げさせん。まる直よりもめべ。あへ小前の新開といふも痛むのちられ
のなり。女を二七十四まして経水通じてより男ひしたのちまた。あへべ
縁の手いしぞ中の行ちへども。其場よ陰を其時よ差ちくるちされ
ぐちりの嬉ちの出るのなり。交合戦場の数ちくちた。和尚ちた男い
始くの戦場よ初ちくすまぐ。人のちぐちし紙ちちんざ中ちよ男の
大きる初ぐ年ちまま。ぐつぶん縁の新開ちも。吐場のちく出る女はあか
ちたちも。されば手いしぞの女紙得ぬさせば。ちりよするのは好まねちり。
男の方よい中ちた紙とげちちも。女ち何のちた年ちなく。ゐつのちちり
つちく痛むち海ちり。ちはちるちたちちべちぐ。十二三歳の少女
ちまちも。手入ちん。其子の好む衣裳ちさちり。手遊び
の類ひ菓子ちちつちく。見世ちの陸ちり其品見物ちどよ連行
病よ入ちふ時ちどいまぐ元ちさんね行紙そちくちちでまん。せば。ちちり
くちぐいちちどいちの陸ぐちちちのぐちよ。
ち紙教えてゆる。なぐもちいちの紙笑てゆちわどよ。ちち形くして居る
のぐちとちへば。色ちちるの紙世ちゆちよ。子ちちちちちちして遠慮

しく成るものなるまべ。其時中指よりはぢめとつけく。きづくよいろふべし。
二本のゆびい這入ることのなり。かくまるゆ二三度よみべべ。自然とあくぢち
ゆるけ。おしべ廣くあるものなり。あるいは首尾を合して。ゆ縛よ本
ゆるゆる揚すまべいるべ指あるはんぎる少如なれも。をまくあつ紙いぢれ
くる時より如きぎして男ものをしくなる物あり。其樣をゆげさべ
ゆるゆ。かくまくまるいるゆ揚なる少如とらくども。年間のあつよ
異ちくることあり。出るまでもまべさ毛のまくねかまくけのうち揚まで入く
毛際ゆて毛つのふちをまするまべ痛むものなり。ゆまく深き紙好むこと
ありとも。意して ゆゆべし

艷紫娯拾餘帖

雪



其三

其四

其二

好奇南又平壺

十二

其二

其三

艶紫娯拾餘帖雪之巻

雪は豊年の貢といひ。枯木に花を咲せ。野も山も一面の白妙に白銀を敷たる銀世界に異ならず。梢に積るは時ならぬ花かと疑ひ。夜の庭には照そふ月かとあやまたる。山里は雪のためにとぢられ。谷の戸がそのには道行人もかよはねば。茅の中道跡つけて。訪ひ来る人の志をかんじ。雪のうちすさびかたらひ終ればあはれなる宿をとへるなど。薪の竹折くだくも。雪の重さをしれば目覚さまし。鳥の声松吹風の音も絶て。物寂しき山の峰しき家。誠に雪の庵には。軒端かくるまでふりうづみてあるさまはいとひ。旅人も道踏迷ひ。跡も絶ね。谷のうけとし埋もれては。峰より落る滝も氷るぞ。ふもとの賤が伏屋には雪をあはれ住がたき。世帯ある山がつも。雪にとぢられてはいづくも同じふきよせといひ。夜の雪の窓には何となく燈なくして書を読るなどもみな雪は賞する景物なるべし。いかに今様ぶる人の好ふものは清らかなる雪を深草乃里袖をちらちらにかけとある。秀句まじりに氷る戸を閉て積る雪の日は。河豚と巨燵を友として。どちらも何とやらん縁に縁意のふかくうちかたらふ者両三輩。大がわげて女の雑談。中にも九別わたり経へ廻りし男のいふは。さくらぬものはあるまじ。それなる真似もでけぬと昔から人の通り。備後備中の片田舎には。中通ひといふ事ありといへる訳ぞと尋ねるに。まかり出て云ふは嫁入して後三月が間。月の末に聟のかたへ契り。月の末は親里へ帰りて居るの之

こ都さかり繁華の地なり。暁らしくゆゑども。名所遠境
のなりとして。幼稚娘成始として。十九やそちこ三十よ近き女まで
まもひする事にてうんわりける。かく一条いうるる拵る親父が肺肝を
くだきて。男女分別なくなく垂れんかわどまでのいとまるるわら
じとぞ始めた。さてねどよ男の心を。わるる川の渕淵よりたくて。かくり
やすく。ふる中でも鼻をつけが。あるよ飽くやいんば。夫婦なだひよ心安
ぎてよ。ありのもてゆく。後ろの貢いものも咎わまて。朝夕めより来る物
も始ーからとはまぐひと出つけ。気がかるね本稽。おもしろ
うんばとうとくなるあくよ法華でい。女の分ものさうくよ。かるまんきれ
法師のや。伊勢の神を女神なり。神代を女わるで形り。男のまふも
なるなる。ひてやんるの口出まるといんば洞の人びの業たうこかるいち

時。早ものきうぜの立ちのけぞーー。さきび嫁へてより毎夜くー文ふ
だうまく寝てくー十日ふ夜。文輝ーーびひよ飽きとあく。下世話よいひうんを
いが前の赤ーーー。一日色の情を毒とるひあんべーさてもまもひする女
乃ふ不ぐ形ーー物いわーど。かつとの分よかるうちい。ぎてまーち孫の例く
ゆりく。まだい男の肌をあるるもあるまぐきと思ひまいせば。男ものの
きー毒うぐきて。夜量のうちちく。間ぐふすれぐよ納戸へ入く思び舎。筆
紛ーうぐ女形よ。縁ーよさん揮つけて。わるうよ心おれのいー人ーて来ーー孫
かるくます。ぬぶくまれが紙をはさー。文合ことのうぶ面白くわを咎ぐき
家の夜を。筆もむすぶぐひーつ夜長。二ッの頼ぐ紀ーつのて。いたる放まん
比翼連理。ちれ多乃ーを又わぐきめれ。さて新星人。屋ーや香。序の
さうーも郷へどーり。十二日のひぐーもーーーーーく。日代ふふわど手 けふ

より何日めの夫の内へゆりて抱式あゝべんるど。抱式をかぞへく結
ふをちよちよう抱きまぎられ。ようく其日よりて寝ちがひし
吾夫の例へ戻りて伝へまて。よろづのまざをとりまるひ。日の暮るる
さへ待久しく。関いまび第沈さぎき。ひゝつ懐られとの。私しいのも
うちちまで。まづ行ゝまびて伝へて。此ごの移やのさびを。ゆつき
あどのけゝまび。夫の一物まに風。帆だゝら式さて小通すまび。女のみを
ゝくみぎゝさゝる。物をもるいとで顔赤く。主和うちひろげく赤どけ
ち式内役へ参かて。ちよりと宮まれをあでめゝまび。赤あり大かさるゝ
ぎだ赤よめふゝ ねめをかぎん。いるゝもはんざく。巻ひの一物。二三度
回み度 ちよりちそくねそゝすまび。伝ひ若もるくぬるくと。此日ごろ
かゝ待ちびく。赤ばもたりる ね情のためる。かいざそ加く通よ伝ゝり。

抱差もせぞその内ゝ。赤ゝゝ法ひて わりけゝぶ。双方ゝをよ乳をめゝし
めまりとやきゆちゆうるのまで。此まるひ式たのゝそ。一日千秋のおもひ式
あゝ。待ちまちゝる女中。女のみもあしさぶぜん。男ひゆいゝを
みゝゝたゝぶ。猶一物ハ閑中よ在ゝく。抱きゝとハ
狭ゝそのおゝこぶるめゝる秘曲をはゝくせび。女ゝゝる正味るゝ。抱をを
づゝ髪式ゝ。たゞ其形式ふゝゝくと。ものゝる手をいゝ蒲団を出て
ゝゝ行ゝ名を探めるき。絶入ゆゝるよゝ。ぶゝ女ゝまりわいせ
ゝんゝ日待ちまゝて。洞も絶ゝぬその次ハ日ゝがいよ。せる新開式ゝの
ゝく。浦山ゝきゝると男ゝ人も多けまて。雁も鳴ゝるものゝそ味ゝれ
其男ゝゝ抱ゝ食ゝがゆゝぬゝぶゝゝ。先蒸抜ハ味もゝく。蒸をゝなゝく
青ゝちけまび式ゝゝ。只本来毎一物のゝゝる毎よ。ゝゝよ使ぶき

沢山つけうとも。大ぼう物式拾ふやうなもはぎれなく。
いろう迷惑するのよ。金魚ようさうがうし。雛よ山椒。さうれん干 蓼乃
とちぢですこくとりより外の事もわく。十四五の新開よりもうか事
ても。二度や三度まで。其の味の出るもの男ひもうるぞ。かうべきれうし
すちぢりの女がいとしつやうまど。さにあるぞ。ねてあまとうて数
の男よ番ふる女ちまぢ世よるのべとうくどと。自然と玉門のうち
ちるくありて。間ほとい法とうく廣がる屋て。おまり孫き物ぬり。ぞまび
吾新開より日すゝ神ぬる玉門の。其一物の糸の癖式ちゝ孫ばいけまでも
ちいとうとして。それくの格別の上開よあるもの彩りなく四十の板を
孫ぬるも。美ち時よなどのざるん。一生の徳とうよ色し。数新枕里帰り去
まのくゝ。一年や二年乃内をゆうとゆみうよ去ちすれば。ちがゆく

ぞくゝ男女とも功者ものぞ。おり孫とも落し其間よ女もよがと
いうる式物ぶへ。そまり縁のつひやう。ものちなげて麁式ふるあんだい法よ
くいざち去めゝ事。其後ゝくあゝ功者ぶできくく男ぞするゝ紙女乃
方ゝひすゝちけて。あくゝる一物式いぢり紀。男乃よゝかがせるゝあよ
をが孫くゝり。形ふまもかゝ。歯をくひあるゝぶるよ増長しをを足
もふゝ物ゆうよどちぞれぶゝ法のちりくゝれ。後く文弥が出くい法ち大
ぶのたちりがついくゝちゝあゝ日けもあ孫ぞろぶ。美よ打ちふ法ゆう彩る
ちゝ式いひ出ゝ。ぞとゝ法あきぶうて。上くの好女と去ちゝ。まの色
たのひえけぶめ。ひとりをすゝ二ッい数がるゝと。二ッかゝ孫ふ三組
蓋の格で。初あか二ちんこぶんやハ大きく紀くしゝ彩くたのしむが
年神さゝへの巻ぶ。年式を春ぞさゝるゝ時四一ぶよ

抱付く寝ゆう。雨降ふる夜も世間が寒ぐぷりとしてよ。やとの秋の
晴が来ぐ。雲巨様で孫ゆうぷ。やぐぷりさぐで抱きて孫る
のが上分別。秋も七夕さまは如支が浦山しい。いやく年は一度の
あつけがあい。年中一所は寝させくわげい。夏はいつぐの涼しき
くれい。蚊帳の内乃曲交合ち抜きれりろけま。冬ハかとひ乃四畳
半。茶うをとりの有るめで。男衆。
持てへ。下ろう上つろぬめくまままべ。さいぜんく待ひて。うろうひくち
くる西の門。一さくへもさくべとそ。ぬくく抜ぐと子宮のまつり。男
の寝よ来ぐつた。抱つけく戒とりぶ。好むが所成おりのまま。猛う
ぐまくく金ぬよ法くひ。おそ狼藉あり精成ゆる。来ばくく
へく居ようと。のぐある所をとりく。かくし。年多くくとのハまく抜
ぐろ別たる右上下はきくひなく。来あくうる実廻し。根のちくぐ
潮は除む龍のおくく。ふかりくとと物すまべ。九万九千の鶴目の
元の孔。九百九十九の嵩くまで。みふ一時よゆくむゆうぐ。三千世界
ぐちつけめと人。寄ゆうぐでぐろまくく。雅いひ出ーさゆしゆう
くくを来ゆまと。来づくくとゆさゆまべ。来げうよゆらうとちつく
も。これがゆくぐる居らませう。幾度ゆくる数限ぬ来れ
ませねと。おの孫如い世体生分まくの一緒とおりのる。天ふ此
交合するくくるの行ちり。かく猛ふ乃盛ある如ち出會男くるぐ
行くまねば腎虚火動の病ゆく。胆で魂逐ふるぐろ。されが
かくゆうの如く。肝甚の戦場る抜くて。得ふせぬ古来道理

なるまで。さるまふぐう男社に宮より使ひ書く氣紙やりて。いろのる信義
降ぐりでも。たまるあるべうぐ。茲に大事の秘傳あり。さう
いふ女より出逢ふこと。男すこしも。たんのうすと行のよ
まる女のゆゆ歩。男精氣紙のさぐよ。半時でも一時でも。末のゆうふ
発新させ。ぬきさし精ゐよ。ちびまさゆうでふふ。ゆよ
宮社寄そまび。女のあいかいぐりして。鯉ゆふけまづまへ。俗の若もなく
ゐる入る。見第一の養けちり。さまで大かと十人を十人ゐぐ。其
まつさいゆよ。増ぐなき。女の家ふい物ぐ。閑に
してたちくぐ。かる大事は臨むまい。一俗行のよ其まへよ。清浄ある
冷ゐ紙一は春でむ門よむふと。日頃疲れる美
武者でも。戦場ふ氣ゆませば。ちりとのよるむしでも。相手ひ当て
いはまでも。ゆうたくひまけねぐ不男強。其刑意とそ頼母しけれ。ゐる手愛と
ゆうとと。男一精ぐまぐ漏さうゐぐ。ゆびさたよゐ紙つけて。男の
腰紙ぬすべ。ゆゆや紙かを脱よゆゆく入ゆとと。其まとまを
て永く保つゆ。是まで養まく秘密の一ッまり。大酒大食の後むし
かくしい大毒ゆを。ゆかく男い精氣を久しく保ちく。女ふい十分の気
悦紙ちくせ。好むまゆく 縦横無尽ゐ 深淵の秘郷をはくし。人の
纖一毛のちくを皆一物のさたよいまわげく。女ふゐ氣しひとさうせば
男つぐ高ゐよ油い筆紙は走はも。常くゐ書ゐる女子でも。其場よ
のぎくてい。ゆゆのゆくあくゆくくくまくくと

毫繊樣指帖

花

安喰子
又平画

あるきこえもすべよう
よいうをそそうこふ
をうえてやりませう
いちべうみまさを
ふくまもるやうに
つぐきをあび
つけてそろうくと
いらうてゆるの
るんとうとうん
わるまいがや
「アモシ姫さう
おそまはあやう
どざりまん
そーそわのう
こちらも
ゴルてをりませ
いろそそづりたよ
どざりませ

其二

「なんにわるさがていよのいかうらまきの
のぶきのけとてもるさまさらとおがあを
とろくこまきてろのまちくさるはきろそく
ちををみちらとこまでもちんぞうでも
いやちうろるねはせまのざよかそとるい
ふれかへうまくいひとりのるる夜のさあ　さふ
ろのりうざいくのたんごかいわうせまる
ろるさへもおるろはるるねちくづあ

えをうこれまは男をもつてだんるるのよ
こちのくとせるをやくをものまるやふ
なのれうくるもちかけるいきるはをごいて
徒てたぶいのこーのつくくてるりいまと
ふせさりいちうせうちんのくまるをど
ふをるるふべうれーうらうとちりくわど
みもよのわちれをまちびさこの
ことさらいうころるりちおどうど
えをやうまちとけくこたうりとぞりせめを一生の
ちりめでふうのこちどのあるさけよ
わづうるまこいのめをいわるからいちちも
まるくるうねうくとーよ
ろ　きるうくうるい

「うるゆもとうこいるいるいるどは
分ぐまちをうふおろうをーて
ちうさうすまこいきまこーゆ
いとうるいやうゆくく
つくきをたくさえふいはを
そうくとめるをだうをを
いまくくんそいくみけまが
すこーくはを
だかりいまをんをう
いちつまやうどもんだうを
ちッくこいのを
とくくをかまが
のちるれがくくるくを
くるものだやをとのを
うるれひがちりく
このをのんをつけをすれが
いをむものでいるい
くがくく
ゆくをちをとあくを
ちるをこのゆうるかうりく
ゆゆゆるる上角いわるまん
すこーのうちの
とうくくわやを
のぞみのものを
ちうをうぞ

「あびのもさろぬゆきうろうまん
あがゆるがをとねのうくより
かくるけるえんがかるて
どうもいくぬるときろく
ごえはいくひくにぐちを
ちりつけい
「ゆえいこの
まめへ
あみわが
いくこころ
いこうまはぬか
こうえやきこ
いえそうこ
ぞろまん
しあんと
つくろ
あろえ
あそ
ゆき

「げせにふまるを
ことりどりなせんふろ
あけるそどやうを
わらふといふるを
かゝるそくより
ちりくるゆへ
あわゝ紙ひろせど
ゆびもるく
たごふつゝひくるふ
おりひのゆろの
たとつびゆく
すひつゝてねえさゝグ
るゝねゝ
今でさえけやうよりもいゆも
あさゝぬ上かい
いゆ十神ゝもりゝゝんが
いゝるゝるゆゝちゆゝがさえ
そゝるさのかゆのゆゝとゝんそん
ゆゝく ゆやゝいゝたゝゝねゞ
るゆゝぞゝぐゞまえつゝて
かりゝびゝ紙ゝゆりるゆゝるゝ
かゝいゝゆゆゆゝとゝゝるゝゝゝびゝくゆも
ゆゝゝてゝゝゝゝゝゆゝのことゝまで
ゝゝぐずゝゝゝたゝごせゝゝゝゝゝんねゝゝゝゝ
そのゆゝふゝたゝひゝいゝゝゆゝゝぞゝゝゝゝ
ゝゝれぬをゝいゝゝゝのゞゞゝゝて
ゝゝまゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝ
「老女とゝいひゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

「たとへ
びやうきふ
さしれば
とそ
ぎやうきあ
ちこちく
ねくま
ませう
さそめのふ
れんさうよ
だきうつせそ
くださり
ませ
「ていさやぶるえといちふが刃へすまび
ちるわどたろまやふるみてはう成
こすようろおやうのおめつがわるめろ
まいゆちくちうやをかけて
みたぜんいかさね
佐ゆりぶや

艶紫娯拾餘帖花之巻

花とりよ一字題も櫻乃花のみなりとて。萬葉集よ花とてなく
みえい梅形り。古今集よりぞ櫻を正花とするとの事。普通
の説あるべ然もわるべ。まづく春は花の名よ長閑よ咲られば
待よ仏説ばく。散よ哀ばく。命よかくもはかなきを
恨ん。遠山櫻を春ん雲よみるとく。ひそら形るとをいひ。春風よ吹かく
ばの枝ん雪よ咲れねもうとの日よ曇る。花ば風ざつる雨をいひ
風ん吹よ散ばく。ふ事よとかいち。ひのぶるよちるもの咲ちなげき。うそ
かけよ眉ん神櫻より。咲とのこさば咲もたしめね。苦ば
ばうこび。山も笑あふ花ば花だなり。水こうげよ舎を思ね宿よ
藤霞しく。古今もうとく花の名。山ばよ日頃咲ふべ。
行くも去ん咲ん咲ん咲ん咲すばこび。ひのちばばよ。此うらく咲ふ
ん咲ん花ん咲き里へ帰ん。形の動章ふ見返。又兼ん
春ば笑ん咲ん。一枝もとで咲ん。花ばれ咲の
ん人や枝ん兼

花さけば貴ば むすぶと。天地自然の道理あり。人ば恋ん花
咲を待ん咲ば むよ異あんば。我男ふ恋ば手折ん。後ば咲ん
櫻ん形ん。げんぶくの女房ぶり。さんらん場の賞が出来ん。
ばれつまりの腹よ実がいんと速ば咲ふ。花のさかりを添め
ん咲しさ蕾ひん。きをば女も懐姫ばるとの事がんば。泄
ん咲ん咲ん咲ん咲の間のん咲ばんと。不男でもばいでも。西門ば咲ん
戸の格よくばらせん。金銀よ不自由ばん。衣装かんぎ仏のん。廿上い

が紙をもって来れと。主人のかおしさに。屋むとりの花 おれをそまと
なりのあれ孔をかくまとせぞ。ようんどを為ちく貞女の歩んさく
世平女ほど罪ふのし。嫁入しくとやを生涯火がとまり。まるやや
けっ偽しまと。おかくるあるとと義知して。母子一所に暮ふくとと。不審
紙をとる物のあまと。いちどう二度でまぎおのあちも知ぐにとまるも
あまと。又ふくとせ二年五年七年かくるひとあるち
交合ことの出精ともとずと又くとり。品ものとれき少年のまこと
ふとまりかくまりく子とれるとと。其気ざしあるち為ひ。男
乃あぐがちれもしく。孤でもさそくる男人ゆ名。まとくぐ者り
がち。一物ちと生ぐあとこいの偽称ままと。おとこのかのかまと
白あり紙をむはると。夜よ入紙待みて。床の中に入ぐ為まく

孤いと男紙ゆるれとし。いもでもおくでとさとまやもぐ。かの濡紙袋
まとりて。玉いのうちあるくと。掌とうるひてう形る事濡あうれ
どとく。子宮まとくくうとくく。一物のまとやつるや。病くびよ吸射
て。紙もて吸ようおくく。古紙りして掌ゆがどく。男かくと紙ゆべ
ふとる紙とぐして。実ふく実。まとく濡くあとひ。なぞ上下よ腰を
まとして。するまれやうよ開紙すべし。此とれ子宮よ吸ふちば
まとくんとくくもとくがく。男の精を吸とる。原紙目漬よ千倍
せり。女開中よかゆと紙生じ。子宮自然と紙開紙。かとくべを
加くんとして。飢とる鬼の狗児紙逆ふよ異とくぐ。女陰紙悩乳
して。醉とるがおとくおとく濡よ紙て。うぬ。ねとくく脱ぶる。一猴
の子をあとべとくぐ。是がまちあちと子紙屋紙ぐきまとく形と。孤

月のさはりくる事。常くる輪をうけて人目も恥らいぬれど
大よそ十四歳にも初まるものなり。五拾古月の様まもで。不断乃
ことなきくるしかるも七拾まで続なり情しくて。毎月に毎年なり
五月より一度十月に二度くるかなし。さまにくる女乃かくるにて
後経とぞなり。血道のうち出づく。とかくせん陰鬼生ねのる事も嫌乃
ますとともよしい。諸人のこのむなり。毒といてせんふ属られぬ
ある其女の者ん前子がありてちる。上之亦ありるに速慮あり。後ょりこれ第一
こんでる是むとより花が出れ。第一復のからくりきも忘れ往うくとも
たらでとなりとし。女の紗まり千すへし。先懐妊のまた生また指入形が肝
紗あり。たち古の勝ありるさへ所なり。意かくづつ子いちるなり。くよる乃
その指先かなりいつまも深くいまぬんとしくても。指紗ふしてうかゝなり

唯血道の病を悪くして気なを気をかうし。かくしておなかに子を孕よ
さけるとうの憂もなく。出生出る児も究屈なくなきぞ。ひとつくとする
血の門。前後左右のきりひなくとえいみ多く出たまへせ。指先
四方をえぐるかう。さやうち扇をひらく如くなれど。男の力つくらふは寿前に
くだらきをとし。かくしておかく十分に。ただひも意を動かして。さく後ろ
から一物にね。ぬめらかしくくはねをさしはすれば。深く浅くも自由にまて。おのの
気かちく事ぞかし。かくして交合は懐妊の身なるあれぞ女の喜悦月
ごろよりさかり男も労れど。生れ児の瘡に痛つき気づかひなしぞ。さるず子
と産て後。七十五日より前の禁忌第一なり。交合せしは禁じめぞかし。過る
ときとは。血が乗せて病となる事。また血なら血となれもとく
古紙かんで七八月。よくなるをとさくるといへとも是をいふくと

せまい。さるべくして若き男女へ。其事本の遠くしき時うまれ。病乃ち乳
うち見すれ。今世よ形ばべくして。こまぶせぞくん居らつまうと。ふろ間も
わたらるあまべ。産後ち男女別こよ。部屋を面ぐして休さーむる。まこと
毛雲親文ち百成ち婆を側ち寝うまる。むまこの一ツあるて和産
しくより其後ハ面の風味こを。世よまぐまこ活めとなん。されば
田舎の孩ちも。青岡八たんまを分くまぬ。うまぐぞこいひあくふー
ち。子ち生産ぐる孩のおいち。悪血くぐりて黄血このひ。上ち紙
流したる米のぐく純粋の味ひとちうく。其内合ちちとしく
ひのあくうちる米もを如く。中く葉まぬ。いくまぬうまみ
本米妙ちるあんぐぞ。たぐ知くの不生ちん。葉宮ちいえ乃む
後くあまちて。一儀始てのわぐん兎もあまこ。後ようれひまちう
てちり。産風宮捕まて半産あくふ。紙ちぞせんかちふき。後ちぞ
知後くちちるおいち。まづ常のぐくあまちる紙
くこ。面ちまぐまこ。女のあまこ。ふあげさせて男あまる紙
つ紙。其多まて女の左後紙ちまぐ。おいせまくまりて
新岡の上岡ち知くーくちり。其ちぞうもいくぞ。又法わち女の右の
黒紙あげさせ。たまの黒紙伸ちち。深くつ紙深くこまぐ。おい乃内
右の方へ。面まぐちくわうて。すまちち乳味まこ接別ちち。かくーまい
かまるぐくち。たまる紙あぐさせ右紙のぐーて。岡中のたおをこちれば
あくひちうひ知くたちひ形くこまぐ。女の産悦此ちくわぐうぐ
岡をまさぐまぐちつ紙て。流まいぐち陰ち漏ぐぐく。左腹ち法ちひ
後の乳ちちまくまぐ。大腰ち法ちて。肚門ちいちち米ちくまぐ。おいと

肛門とは。陰どーの穴あるまで薄き皮にて。前後のきっぷひとり一物の勢ひよりまち歩く。あるひは女ぬひ[illegible]すまべ。あるまで怪奇すること[illegible]べし。產後の玉門ち何ちく廣くあるとれば。交合の時玉門も一物を。ちくとぬぐひとぐべし。さすれば玉門ことしたる志まりのあるん。石女よりあるて枝ちたのちり。まと思ひきちく接美ちとべ玉門の嗅ちこあり。せまれがちる廣きがちるあるとちぶちよ。ちぽくいのは せまれ玉門つちり。びちやく 咲のは子を產ぶる時あり。此なる者のすきまじきは。屋風紙や障子ふまる如ちおとく まては。遠青のちる事めざましく。音紙笑くちまくらまぶ。まして吾一物の自由ちせく。者とき決てたのまべ。是ちくことを保表やあるん。国門の戯ふま人も秘を。かくい顔して居ちまも。ちけれ

ばのぶ男女の情態。ちくりさ作ちまちり。勢羅の法ぐく ちまも。周ちよ汁ちの作ちちち。ちくのぶ人間一生の德ちてあを さ人ちまれ命ちま。女ちは田み度の媾をちくさせ。男永くたのちんせ。三度ちは一度ちをれば。男女の養生ちく彩ち。交合を為ぐくいふ人ぶ らば。女丈生法ち入ぐちよ。二日三夜ふまぐちる。一年三百八十四日。閑ぜくの猪ちる。おまちちむちちと笑ちちぶ。交合為者の秘傳ぐちし。 ぶんど澤山付ちくあまで。爰ちは丁數限ちまるまべ。後編ちゆぐちく あちちとく。まちのちゆせ待ち

東京研